

シリーズ

名演探訪 ～日本の合唱

9

「水のいのち」

早川 功

令和5年(2023) 2月28日

click [Isao Hayakawa 集まれ合唱!](#)
facebook公開グループ「集まれ合唱！」
に連載したものをまとめました

「名曲」と「名演」には定義があるのでしょうか。これは私の個人的な考えですが、「名曲」とはアップデートされ続けるもの。「名演」とはそのアップデートが成功した結果だと思っています。つまり何度も繰り返しいろいろな演奏家に採り上げられ、それぞれの演奏家が独自の解釈を加え続けるだけの深さを持つもの。それだけが「名曲」と言えるのだと思うのです。

モーツァルトやベートーヴェンの作品にいろいろな版が存在し、同じ作品が何千回、何万回と繰り返し演奏されてもなお新しい解釈が生まれ、成長する。中には奇を衒ったものや、的外れな改変がなされることもあるでしょう。しかしそういう演奏は淘汰され「名演」にはなり得ないのです。過去の演奏をなぞっただけの演奏も淘汰されるでしょう。人々の記憶には残らない。そして演奏家は常に「名曲」の新しい魅力を探り続けるものです。

日本の合唱曲の場合、この7～80年の歴史の中で「名曲」のアップデートは繰り返されたのでしょうか。作曲者が存命で、自作の演奏行為を行い、録音に残されることがあります。それは当然、理想的な解釈と捉えられ、その表現が絶対視されることがあります。しかしそこで終わってしまえば、その作品は「名曲」にはなりえない。矛盾しているようですが、作曲者自身も思いもよらなかった作品の魅力が違ったアプローチで発見されることが重要なのです。それを探り出し、合唱団に納得させ彼らの自発性の中から新しい作品像を産み出すことこそ指揮者の本領でしょう。

ここでは高田三郎の「水のいのち」男声合唱版を採り上げます。1991年の東西四連で畑中良輔氏が慶応ワグネルソサイエティを指揮したものです。ここで畑中氏は水の輪廻と人生を重ね合わせた詩の内容をより印象付けるように最後に冒頭の「雨」を繰り返させ、静かに浄化するようなエンディングを聴かせます。いわゆる「畑中バージョン」で、高田氏は始め許可しなかったそうですが、再三説得しついに「畑中良輔演奏時に限りその解釈を認める」ということになったものです。以来畑中氏は亡くなる直前までこのバージョンの「水のいのち」を繰り返し演奏し続けました。私も混声版ですがこの畑中バージョンを経験させてもらったことがあります。

男声合唱組曲「水のいのち」

作詩：高野喜久雄

作曲：高田三郎

指揮：畑中良輔

ピアノ：三浦洋一

合唱：慶應義塾ワグネル・

ソサイエティー男声合唱団



<https://www.youtube.com/watch?v=hM9u6e09q6k>

中でもこの時のワグネルの響きと細部まで彫り込まれた言葉の美しさは凄い。そして最後の「雨」は終始ピアノシモで歌われるのですが、そこでも音楽の核が失われない技術の高さも大したもの。この時はバリトン・パートに現在ドイツの歌劇場で活躍中のバリトン歌手の谷口伸氏が在籍していました。時折バリトン・パートが突出して聴こえますが、それも畑中流の計算かもしれません。これほど美しいバリトン・パートを聴かせない手はないと言う。もちろん従来版の完成度の高さからこのバージョンを容認しない意見の有ることを承知の上で、なお「水のいのち」がまごうことなき名曲であり、卓越した指揮者がアップデートした一つの成果としての稀有な名演であったと思うのです。

【シリーズ バックナンバー】

- ▶ 1 男声合唱組曲「枯れ木と太陽の歌」
- ▶ 2 男声合唱組曲「月光とピエロ」
- ▶ 3 男声合唱組曲「柳河風俗詩」
- ▶ 4 女声合唱組曲「美しい訣れの朝」
- ▶ 5 女声合唱のための唱歌メドレー「ふるさとの四季」
- ▶ 6 混声合唱組曲「嫁ぐ娘に」
- ▶ 7 混声合唱、ヴィブラフォン、ピアノのための「動物の受難」
- ▶ 8 混声合唱組曲「島よ」
- ▶ 9 男声合唱組曲「水のいのち」
- ▶ 10 男声合唱のためのカンタータ「土の歌」

Back

音楽・合唱TOPへ

Home

HOME PAGEへ